

国際的な評価高める「Nプロジェクト」

京大・中村助教、原子力委員会で取組み説明

原子力委員会の定例会議が1月13日に都内の内閣府庁舎で開かれ、京都大学複合原子力科学研究所の中村秀仁助教(専門・放射線物理)が在大阪・神戸米国総領事館から託された日米関係を象徴するピンバッジを胸に、最新の研究活動について報告した。

中村助教は、大阪高等学校の生徒らとともに「Nプロジェクト」に取り組んでいる。Nプロは「科学を共通言語に社会と対話する」研究活動。例えば、放射線など科学について学んだ生徒ら(文系理系問わず)が、地域住民との対話を通じて学びをアウトプットするもので、社会からの反応が生徒の自己肯定感を劇的に高めているという。

原子力人材の確保をテーマに開かれたこの日の原子力委員会では、委員から「これまでの(7月)を機に、昨年には400名を超える高校生が大阪・関西万博の舞台に立った。158カ国・地域語に翻訳した手作りのスケッチブックを手に、世界中の来場者と対話を図った。すると、今度は海外からの注目を集めることに。在大阪・神戸米国総領事館からは「STEAM教育の先進事例」などと高く評価され、昨年12月、米国総領事館後援のもと、高校生が小学生と科学を通じて関わるプログラムが実施された。年内にはJRR大阪駅隣接施設で大型科学イベントを共同開催することも決まっている。



原子力人材の確保をテーマに開かれた原子力委員会



(左から)吉橋委員、中村助教、井上内閣府統括官。中村助教は日米のピンバッジを付けて会合に臨んだ。中村助教は、これまでの活動について「前哨戦」だと位置づける。今後については「Nプロにはいくつもの仕掛けを散りばめている。それらをマニュアル化し、さまざまな学校で主体性開花の連鎖が始まる瞬間を多くの生徒・教員・保護者に味わってもらうことが一つの目標」だと語っている。